

## 花蹊記念資料館と新型コロナウイルス感染対策について

新型コロナウイルス感染拡大による未曾有の厄災は、その終息をいつ望めるのか、今もって見通しが立たない状況です。感染の予防と症状の悪化を抑えるワクチンの接種が現実のものとなり、希望の光が射しはじめたようにも思えますが、日本を含めた世界の多くの国と地域で、依然としてこの目に見えない悪疫との戦いは続いています。

新型コロナウイルスの災禍は、教育の現場にも多大の混乱をもたらし、関係者はその対応に追われることになりました。大学の教育研究施設であり、同時に博物館でもある花蹊記念資料館も例外ではありません。

博物館には、地震や風水害、展示物の盗難や不法侵入、資料等の破壊行為、さらには入館者のけがや急病等の「危機」にいかに対応するかという「危機管理」の課題が存在しています。今回のコロナウイルスの流行が、入館者や職員の生命にかかわる一つの危機であるとすれば、文字どおりコロナ禍に翻弄されたこの一年の経験を、ふたたび起こりうる類似の危機への参照事例として記録にとどめておくことには相応の意味があると思います。

昨年3月、コロナウイルスの感染予防、拡散防止のために、予定されていた展覧会の開催延長を発表して以降、終わりになき不安と焦燥の日々が始まったわけですが、資料館を中心として関連の重要な事項をあげておきましょう。

- ①2020年3月2日（月）、3月上旬から開催の予定であった「跡見花蹊とその遺産展I」（3月12日〔木〕～3月31日〔火〕）の開催延期（延長期間は未定）を資料館HP上に発表し、臨時休館とした。
- ②4月7日（火）、政府の緊急事態宣言発出。
- ③4月9日（木）、緊急事態宣言が解除されるまでの間、大学校内への立ち入り禁止。
- ④5月4日（月）、政府の緊急事態宣言の延長発出（5月31日まで）。
- ⑤5月8日（金）、緊急事態宣言が解除されるまでの間、大学校内への立ち入り禁止。
- ⑥5月11日（月）、オンライン授業開始。
- ⑦5月25日（月）、緊急事態宣言解除。
- ⑧8月5日（木）、資料館の再開館について、資料館HP上に、「決定次第新たな展示スケジュールとともにホームページで知らせる旨」の告知を行なう。
- ⑨10月1日（木）、大学構内立入禁止の段階的解除（図書館、PC教室、心理教育相談所が通常通り開館〔開室〕）開始。
- ⑩10月15日（木）、資料館は臨時休館の措置をとりやめ、対象を学内者（跡見学園女子大学の学生および教職員）に限定して再開館。

以上のような経緯を経て、およそ7ヶ月ぶりに資料館の再開館がはかられましたが、再開館にあたっては、花蹊資料館と同類の他大学付属の博物館、埼玉県教育委員会や日本博物館協会のガイドライン、国立の主要博物館の事例を踏まえ、万全の感染予防対策を講じたことは言うまでもありません。資料館入口に入館にあたっての諸注意（コロナ感染対策）の掲出も行ないました。



下表は、2020年度の資料館の企画展の会期とタイトルです。4番目の「跡見花蹊とその遺産展Ⅰ」のみの開催で、しかも内容は年度当初の企画を振り替えるという異例の事態となっています。

1	4/1 (水)～5/30 (土)	「跡見花蹊とその遺産展Ⅰ」中止	
2	6/22 (月)～8/1 (土)	「近現代絵画収蔵品展」中止	「第14回 跡見OG書道展」中止
3	9/25 (金)～12/5 (土)	「跡見花蹊とその遺産展Ⅱ」中止	
4	10/15 (木)～12/10 (木)	「跡見花蹊とその遺産展Ⅰ」開催	
5	2021年 1/26 (火)～2/6 (土)	「博物館実習生模擬展示」中止	
6	3/9 (火)～3/31 (水)	「跡見花蹊の系脈展―独創と継承―」次年度へ延期	

一般的に博物館の基本的機能は「収集」「保存」「展示」「調査研究」ということになりますが、「三密（密閉・密集・密接）」の環境が不可避の「展示」において重点的な感染症対策が必要であり、この感染リスクを回避するもつとも迅速、かつ徹底した方策が「閉館」であることはあらためて指摘するまでもないかもしれません。実際、昨年2月末頃より多くの博物館・美術館の休館が相次ぎました。しかしながら「閉館」が「感染しない、感染させない」感染症対策として最善・最強であるにしても、入館者（入館希望者）を排除することによってはじめて成立するものであることに、博物館関係者のみならず一般の人々も釈然としない思いを抱いていたのではないのでしょうか。何年にもおよぶ準備の末によやく開催にこぎ着けた展覧会が中止、あるいは会期変更を余儀なくされた例は枚挙に暇がありません。こうした異常事態に接するたびに、強く心を痛め、大きな違和感を覚えた人は決して少なくないはずです。

冒頭に「危機管理」という言葉を用いましたが、地震であれ風水害であれ、いずれも目に見える危機であるのに対して、感染症は深い闇に潜む不可視の危機である点が大きく異なり、そこにこそ最大の隘路が存するということになるでしょう。新型コロナウイルスは、感染者の4割が無自覚のうちに感染を拡大させてしまうところに特徴があるとされます。これを防ぐには、ウィルスを含んだ飛沫を浴びない適正なディスタンス（距離をとること）が必須であり、その距離は飛沫が重力によって落下していく範囲を超えた2メートルとされています。「危機管理」と呼ぶにはやや見劣りがしてしましますが、当面は、手洗いの励行、展示室内での「三密」の回避、適切な換気、飛沫抑制のためのマスク常用を大原則に、新型コロナウイルスという新種の「危機」と向き合うほかないのではないかと考えます。

花蹊記念資料館は、上述のように、長期間にわたって臨時休館となっていました。これは、資料館の活動が休止していたことを意味するわけではありません。資料館のスタッフは、いつ果てるとも知れぬ無用のストレスに耐えながらも、日頃、精力を注ぐことの難しい「調査研究」にいくぶんか集中することができたのではないかと想像しています。また、様々な制約があるなかで、それぞれが工夫を凝らして日常業務にあたっていたことは指摘するまでもないでしょう。

花蹊記念資料館は、新型コロナウイルスの災厄から一刻も早く自由になり、本来の活動に専心できることを切望しております。跡見学園女子大学の教育研究態勢の万全な回復を願うとともに、皆さまのご理解・ご協力を伏してお願い申し上げる次第です。